

当院における耳管機能検査導入への取り組み

◎井上 由莉¹⁾、手束 綾子¹⁾、明保 優子¹⁾、玉川 美弥子¹⁾、中村 由香里¹⁾、前川 清楓¹⁾
静岡済生会総合病院¹⁾

【背景】

当院では、中耳手術・耳管センター開設に伴い、耳管機能検査機器 JK-05A（リオン社）を導入した。この機器は、耳管機能障害による聞こえ方の違和感や耳閉感といった不快な耳症状を訴える患者に対する診断の指標として有用である。今回、耳管機能検査機器 JK-05A の導入にあたって検査導入への取り組みと症例を報告する。

【目的・方法】

当院では初めて導入された検査であり、担当検査技師は専門医師による指導を受けた。耳管機能検査機器 JK-05A にて①音響法（sonoyubometry）、②TTAG 法（耳管鼓室気流動態法）、③加圧減圧法の3つの検査を実施。それぞれ検査目的や手技が異なる。①音響法：嚥下運動を行った時の耳管開閉機能の測定。②TTAG 法：中耳腔の圧力を鼓膜を介した外耳道の圧力として測定。③加圧減圧法：密閉した外耳道より圧変化を行い、耳管の開閉にともなう外耳道の圧力変化を測定。これらの耳管機能検査は、患者にあった耳栓の選択も重要であり、インピーダンス用イヤープース

の購入や検査技師間で測定を行い、手技の向上を図った。

【結果・考察】

導入直後は検査技師の経験が浅いこともあり、専門医師による手技の指導を要した。耳管機能検査は、患者への検査説明・正しい耳栓の装着・機器の操作など、他の耳鼻科検査に比べ手技の習得に時間が掛かった。また当院では耳鼻科検査は1人で行っていたが、耳管機能検査が導入されたことで業務が滞り、2人体制で検査を実施する日もあった。耳管機能の症状、所見は変動を認めることがあり、1回の検査のみでは診断に至らないことがあるので注意が必要である。耳管狭窄症や耳管開放症などの診断された患者の経過観察においても耳管機能検査は必要であり、今後この検査が増えることが予想される。耳管機能検査は検査者の手技による結果への影響も大きいため、患者の症状に合わせた検査技術の向上に努めていきたい。

静岡済生会総合病院 054-285-6171（代表）